

〔論 説〕

中英語騎士物語における騎士と馬との関係についての初期研究*

貝塚 泰幸

中世において馬は騎士にとって移動手段であると同時に、長い旅路の間常に苦楽を共にする点で文字通り「伴侶動物 (companion animals)」でもあった。エドワード一世が馬に愛着を抱いていたことやエドワード黒太子が馬を重視していたことが記録にも残っている⁽¹⁾。それでは、文学における騎士の馬に対する一般的な態度とはどのようなものであったのか。国王や皇太子のように、中世騎士物語の騎士たちも馬に愛着を抱いていたことを示す場面が描かれているのだろうか。もし文学において馬に移動手段としての価値しか認められていなかったとすれば、馬はどのような文学的な役割を担っていたのだろうか。いずれも作品のみに注目するだけでは、説得力のある解答を得られるほど容易な問いではない。文学作品のなかで描かれる世界と現実の世界は密接な関係をもち、その登場人物たちの行動や人間性には多かれ少なかれ現実の社会の騎士の姿や人々が思い描く理想像が反映されているに違いない。本研究では中世騎士物語における騎士と馬との関係を読み取ることのできる場面を調査して、そこに描かれた騎士と馬との関係を類型化する。さらに中世ヨーロッパにおける人と馬との関係を網羅的に調査研究したいいくつかの文献を手がかりとし、歴史学および社会学的な視点を取り入れて、中英語騎士物語における騎士と馬との類型がその背後に持つ文学的な意義の提示を試みる。

1. 馬の死に対する騎士の反応

騎士物語においては⁽²⁾、さまざまな状況で多くの馬が命を落としている。当然のことながら、主に騎士や歩兵が入り乱れての戦争や騎士同士の一騎打ち、さらには戦争の模倣的な性格を持つ馬上槍試合などにおいて夥しい数の馬がその命を奪われている。これに加えて病に倒れ主人とともに旅を続けられなくなった馬や厩で静かに息を引き取った馬が描かれる場面もある。そしてこのような場面で騎士は自分の乗っていた馬の死に対して興味深

* 本稿は2017年12月2日、立教大学にて開催された日本中世英語英文学会第33回全国大会にて口頭発表した内容を修正し、加筆したものである。発表にて貴重なご質問・ご意見を頂いた方々にこの場を借りて感謝の意を表したい。

(1) Hyland, *Warhorse* 23; Hyland, *Horse* 71-9.

(2) 本研究で調査の対象とした作品は主に14世紀から15世紀までに成立したとされる韻文騎士物語である。これらの作品はおそらく例外なくすべてがロマンスというジャンルに分類されるが、本研究では「ロマンス」という用語の使用は避け、騎士が登場する作品を意味する「騎士物語」という語を用いる。「ロマンス」と分類される作品の主人公の多くは騎士である一方で、騎士以外の主人公も登場する。またその主題は多様性に富んでおり、騎士の冒険を描く物語もあれば教訓的な色合いの濃い物語や聖人伝さえ含まれる。従って「ロマンス」という語は本研究で扱う作品を指示する語としては不適切であり、「騎士物語」という語を使用し、騎士が物語の展開において重要な役割を果たしている作品であることをより明確に示す。

い反応を示すことがある。

馬が命を落とした時に騎士が見せる態度を指標として類型化を試みた場合、中英語騎士物語に描かれる馬の死の場面は三種類に大別することができる。すなわち、「完全な無関心」、「激しい怒り」、そして「深い哀しみ」である。多くの騎士が戦闘中自分の乗る馬が殺されても、その死に対して無関心である。その一方で戦闘中に馬を殺された騎士が相手を激しく叱責して怒りを露わにする場面や、愛馬を失った騎士が涙を流してその死を嘆き悲しむ場面もある。はじめに、騎士の「激しい怒り」と「深い哀しみ」の読みとれる馬の死の場面から見ていく。

1.1. 「激しい怒り」

騎士が自分の乗る馬を失った際に「激しい怒り」の感情を示す場面のある作品は、非常に少ない印象をうける。加えて、騎士が馬の死に怒りを露わにする場面は騎士同士が戦う状況でしか描かれない。騎士は互いの命を賭して戦うという極限の状況に促されるように、激怒して相手を厳しく非難している。例えば、13世紀末から14世紀初頭に成立したとされる *The Romance of Beues of Hamtoun* には次のような描写がある。

To sire Beues a smot þer wiþ
 A sterne strok wiþ outen griþ,
 Ac a failede of his diuis
 And in þe heued smot Trenchefis,
 Pat ded to grounde fel þe stede.
 ‘O,’ queþ Beues, ‘so god me spede,
 Pow hauest don gret vileinie,
 Whan þow sparde me bodi
 And for me gilt min hors aqueld,
 Pow witest him, þat mai nouzt weld.
 Be god, i swere þe an oþ:
 Pow schelt nouzt, whan we te-goþ,
 Lauzande me wende fram,
 Now þow hauest mad me gram!’ (ll. 1885-98)

敵対する Brademond の牢獄に捕らえられていた主人公 Beues は脱出に成功し、途中 Grandere 王の追撃にあいながらも王を倒してその馬 Trenchefis を奪い逃走を続ける。すると Grandere 王の兄弟である巨人と遭遇して戦闘となった。巨人は Beues 目掛けて武器を振り下ろすも狙いが外れて Beues の乗っていた馬にその攻撃が直撃したため Trenchefis は地面に崩れるように命を落とす。馬の死を目の当たりにした Beues は復讐を誓う。そして引用最後で “Now þow hauest mad me gram!” と Beues は声を荒げる。*Middle English Dictionary* (以降 *MED*) によれば⁽³⁾、名詞 “gram” には “rage, anger; hatred, hostility” という意味がある。この名詞には他に “grief, sorrow, remorse, vexation” といった語義があるものの、Beues の直前の誓言— “Pow schelt nouzt, whan

we te-gop./ Lauzande me wende fram,”（「私たちが互いに離れる時には、お前が笑いながら私のもとを去ることは決してない。」）—を考慮すれば、“gram”はBeuesの馬を殺した巨人に対する「敵意」や「憎しみ」、「怒り」を伝えていることが明らかである。

類似する例として、*Richard Coeur de Lyon*に描かれるFauvelの死の場面をあげることができる。獅子心王RichardはJaffa解放後Saladin軍と再び交戦、危機に陥っていたHenry of Champaynを救出した。Jaffaへ戻るよう懇願されたところで敵に周囲をかこまれたRichardはその時乗っていた馬Fauvelと共に夥しい数の剣と鎚矛の攻撃を受ける。

And many þousand before hym schete
 Wiþ swerdes and wiþ launses grete,
 Wiþ fauchouns and wiþ maces boþe;
 Kyng R. þey made ful wroþe.
 Þey slowen Ffauuel vndyr hym,
 Penne was Kyng R. wroþ and grym. (ll. 7101-6)

Richardのもとに殺到したサラセン人たちは武器を使ってFauvelを殺してしまう。Beuesの例では巨人の攻撃の狙いが逸れたために武器が馬の頭に直撃してその命が奪われているが、Richardの例の場合はサラセン人たちがおそらく意図的にFauvelの命を奪っている。このような違いはあるものの、主人公たちの反応は変わらない。Richardの怒りは“wroþ and grym”という表現から読み取ることができる⁽⁴⁾。

古フランス語武勲詩*Fierabras et Floripas*の一部を中英語に翻案したAshmole版*Ferumbras*にも騎士の「激しい怒り」が見られる。作品はシャルルマーニュの騎士たちとサラセン人の王Balanの騎士たちとが彼らの馬とともに多数登場する騎士物語であり、様々な騎士の馬に対する態度を読み取ることのできる描写がある。とりわけ、従者Garynが連れてきた愛馬のたてがみを撫でるOliverの様子(II. 240-5)とRichard of Normandyと彼の馬Morelとの別れの場面(II. 3729-38)は印象的である。そして、馬を殺されたことに対して激怒する騎士もまたOliverである。物語の冒頭、Morimond遠征の途上シャルルマーニュに対してサラセン人の騎士Ferumbrasが挑戦する。フランス王の騎士たちが躊躇うなか傷を負っていたOliverがその挑戦を受けFerumbrasと戦う。このときOliverが乗っていた馬は、彼がたてがみを撫でて信頼を示した馬である。

To Olyuer þanne smot he a stroke / riȝt on þe helm an heȝ;
 Þoȝ þat swerd wer god it noȝt ne bot / bot down by is chyn it seȝ,
 & before ys scheld a-down it glod / & oppon is sadel it ran,
 Þorw sadel & hors þat swerd him wod / þan ful down hors & man.
 Pan Sarȝyn drow him þanne a-part / & to O[lyuer] saide sanzfaille
 “Þou ne schalt me fynde no cowart / a liggeng man to saille.”

(3) *MED*, sv. “gram(e, n. 1. (a) & 2.

(4) *MED*, sv. “grim,” adj. 1. (c).

A sterte to his helm, & pult him aan / & to O[lyuer] þanne a sede,
 “If þou with me wilt fīȝte aȝan / by Mahoun þou gost to dede.”
 ¶ Olyuere stert vp hol & sound / & spekeþ til him wyþ grame,
 “Y diffye þe nov, þou heþene hound / crist ȝyue þe mucche schame!
 Why hast þou my stede a-slawe / wat hadde þat hors mysdo?
 Py stede for hym now wil y craue / & haue him er þou go.” (ll. 588-599)

名前を偽って戦おうとする Oliver とその挑戦を拒絶する Ferumbras の長い口論の末、二人の一騎打ちが始まる。Ferumbras の剣は Oliver の兜を捉えたかに見えたが、剣は間をすり抜けると鞍へと達して Oliver の乗る馬を斬り伏せてしまった。馬もろとも地面に叩きつけられた Oliver はすぐに立ち上がると、Ferumbras に向けて言葉を発した。翻案者はその行動に “wyþ grame” という表現を付け加えている。これまで引用した作品と同様、この前置詞句は騎士の怒りや憎しみを伝えている。さらにその内容は “Y diffye þe nov, þou heþene hound / crist ȝyue þe mucche schame!” (l. 597) である。動詞 “diffye” には “challenge somebody to fight, defy” という現代英語と同様の意味があり⁽⁵⁾、さらに “þou heþene hound” という誘言は Oliver の怒りの激しさを際立たせている。

これまでの例では、主人公かまたはそれに準ずる登場人物が「怒り」の主体となっている。Beues や Richard は作品の名祖となった主人公たちであり、Oliver は作品を通して重要な役割を担っている登場人物である。ところが、騎士物語のなかには主人公と敵対する騎士が馬を殺されたことで主人公を非難する場面が描かれている作品もある。*Sir Tryamour* では、主人公 Tryamour ではなく、主人公と戦う相手の騎士 Moradus が馬を殺されたことに怒りを露わにしている。

So sore they dud smyte.
 Tryamourre thoght hyt schulde be qwytt;
 He faylyd of hym, hys hors he hytt—
 To hys herte hys spere can byte.
 Moradas seyde, ‘Hyt ys grete schame
 On a hors to wreke thy grame!’
 Tryamourre seyde, as tyte,
 ‘Levyr y had to have hyt the!
 Have my hors, and let me bee—
 Y am lothe to flyte.’

Moradas seyde, ‘Y wyll hym noght,
 Tyll thou have that strok boght,
 And wyne hym wyth ryght.’

(5) *MED*, sv. defien, v1.

Than leved Tryamowre hys stede;
He lyghtyd downe and to hym yede;
On fote can they fyght. (ll. 1218-1233)

Aragon 王国での一騎打ちでは、主人公 Tryamowr はドイツ皇帝の騎士 Moradus と戦い繰り出した攻撃が狙いを外れ、相手の馬の心臓を貫いてしまった。すると Moradus は Tryamowr に対して “Hyt ys grete schame/ On a hors to wreke thy grame!” (「お前の怒りを馬にぶつけるとは何と恥ずべき行為か。)」と叱責している。この場面においては騎士の「怒り」を明示するような表現や語彙が用いられていないが、“Tyll thou have that strok boght” (「お前があの一撃の報いを受けるまで)」という発言は、先に引用した Beues の復讐の誓いと類似しており Moradus の怒りが暗示されている。

馬が命を落としたときに騎士が怒りを露わにする場面は他に、Auchinleck 写本版 *Otuel* や *Ipomadon*, *Partonope of Blois* といった作品のなかに見られるが、その用例数は決して多くない。

1.2. 「深い哀しみ」

騎士が馬の死を哀しむ場面は、騎士が怒りを露わにする場面に比べて、その用例数の点においてさらに稀な例である。これまで調査した限りにおいて、騎士がその馬を失った時に深く哀しむ場面は4例しか確認できない。また馬の死に対して怒りを露わにする騎士が戦闘の場面においてのみ描かれている一方で、悲しみを抱く騎士が登場する状況は一律ではない。例えば、*The Awntyrs off Arthure* では Galeroune との決闘の際に愛馬 Grissell を殺された Gawain が涙を流してその死を悼む。

Gawayn gloppeden in hert;
He was smite with smert.
Oute of sterops he stert
Fro Grissell þe goode.

.....

Als he stode by his stede,
Pat was so goode at need,
Ner Gawayn wold wede,
So wepede he sare.

Thus wepus for wo Wowayn þe wight,
And wendys to his witerwin þat wonded is sare. (ll. 543-561)

一騎打ちの相手である Galeroune に Grissell の首を斬り落とされた Gawain の心は哀しみに満たされる。主人公の悲哀は “smite with smert” (「哀しみに打ち拉がれる」) という表現で殊更に強調されている。しかし、この場面を最も際立たせている表現は “Ner Gawayn wolde wede/ So wepede he sare./ Thus wepus for wo Wowayn þe wight”

(「Gawain は狂ったように泣き崩れた。哀しみのあまり力強い Gawain は涙を流した。）」という描写である。互いの命を賭けた決闘の最中、敵の目の前で涙を流して哀しみにくれる Gawain の姿は異様でさえある。この涙は、主人公にとって Grissell という馬が単なる移動手段や社会的な地位の象徴以上の存在であることを明示しており、騎士と馬の間には信頼や愛情といった特別な関係性があったことがうかがい知れる。

涙を流して馬の死を哀しむ主人公としては、Alexander が最も有名な主人公であろう。Alexander の軍勢は東進を続けてアラビア半島へと侵攻する。怪物と遭遇しては多くの兵士を次々と失っていく Alexander がようやく苦境を乗り越えたところで、彼の愛馬 Bucephalus は病に倒れた。

Pe berne blischis on his blonke & sezes his breth faile,
Sighis selcuthly sare & sadli he wepis,
For he had standen him in stede in stouris full hard,
Won him wirschip in were, fra many wathe saued. (ll. 5707-10)

息も絶え絶えになる Bucephalus を見る Alexander の様子が、“Sighis selcuthly sare & sadli he wepis,” (「深い溜息をつき、悲哀に満ちた様子で涙を流した。)」と描かれている。さらに詩人はその涙の理由として、Bucephalus が厳しい戦いのなかに共に身を置いたこと、武勲を立てる助けとなったこと、そして数多くの危機から自分を救ってくれたことを列挙している。そして Alexander は哀悼の言葉を述べると愛馬を埋葬して、その墓の上に都市を築いた。Alexander が涙を流した理由や Bucephalus を人間のように埋葬したこと、Bucephalus のために都市を築いたこと全てが、主人公の愛馬に対する深い愛着を物語っている。

Gawain や Alexander の例のように、Beues の愛馬 Arondel の死の場面は主人公が馬に深い愛情を抱いていることがわかる描写である。物語の終盤、主人公の最愛の妻 Josian が病に伏してしまう。彼女は子供たちを呼ぶよう Beues に懇願する。子供たちが到着すると、その理由や動機が語られることはないものの、Beues は厩舎へと向かった。そこで Beues は横たわって死んでいる愛馬 Arondel の姿を目の当たりにする。

And whan þai were alle þare,
To his stable Beues gan fare;
Arondel a fond þar ded,
þat euer hadde be gode at nede;
Par fore him was swiþe wo,
In to chaumber he gan go
& se3 Iosian drawe to dede: (ll. 4595-4601)

初めて戦闘に参加して以来、勝利のみならず苦しみも共有した Arondel の姿を見た Beues の様子を伝えるのは“Par fore him was swiþe wo” (「そのため彼はとても哀しんだ」) という無味乾燥な表現である⁽⁶⁾。しかし Beues と Arondel の関係を最初から見届けてきた者なら誰でも、Beues の哀しみがどれほどに深いものか容易に推し量ることができる。こ

の物足りなさを感じさせる表現がかえって、Beuesの深い悲しみを雄弁に物語ってさえる。たとえ両者の関係を見届けてこなかったとしても、最愛の人Josianの死とBeues自身の死とともに馬の死が並列された物語の構造が主人公にとってのArondelの存在の大きさを如実に示している。

1.3. 「完全な無関心」

馬の死を目の当たりにしたほぼ全ての騎士が怒りを露わにすることもなければ、哀しむこともない。騎士物語における騎士の馬の死に対する反応は、その大部分が「完全な無関心」であることは興味深い事実である。

シャルルマーニュ・ロマンスの一つである *The Romance of Duke Rowlande and Sir Ottuell of Spayne* ではサラセン人の騎士（のちにキリスト教に回収する）OttuellがMekredoseという名の馬に乗りRowlandeと戦う。RowlandeはMekredoseを斬り伏せ殺してしまうが、Ottuellは哀しみも怒りもしない (ll. 463-8)⁽⁷⁾。これに対してOttuellがまったく同じ方法でRowlandeの馬を斬り伏せると、Rowlandeもまた自分の馬の死に対して何の反応も示さない (ll. 468-483)。別の場面ではRowlandeはサラセンの王Clariellによって馬を殺される。

He smyttis Rowlande þat was doghety,
Pat his noble stede gan dy,
His bakke braste euen in two.
And vp he keste ane heghe cry,
“this was a poynte of cheualry,”
And busked hym for to goo. (ll. 832-7)

この時Rowlandeは“this was a poynte of cheualry”（「これが騎士道の本質である。」）とClariell王に向かって叫ぶが、この言葉は馬の死に対する騎士の無関心を正当化しようとする試みのようにも思える。すなわち、戦場においては馬を失うことは避けることができず、それに対して怒ることや嘆くことなど無意味である。さらにRowlandeは三たび馬を失う。Barlott of Perceとの戦いでは互いに勢いよく衝突した結果、両者その馬を失った (ll. 1357-86)。これまでと同様RowlandeもBarlottも馬を失ったことには関心がない。馬の死に対する登場人物の無関心は、この作品に一貫したものである。

Sir Tristrem では主人公がアイルランドの騎士Morauntの馬を殺す。するとMorauntは馬から降りるように相手を諭す。一見するとMorauntは馬の死を意識しているような印象を受ける場面であるが、すぐにMorauntの馬の死に対して関心がないことがわかる。

(6) 原典とされるアングロ＝ノルマン版 *Boeve de Hamtone* では、主人公Boeveが涙を流して厩舎を離れる場面が描かれている (ll. 3822-24)。

(7) Auchinleck版ではOtuelは馬を殺されたことを怒っている (l. 481)。特筆すべきはOtuelが乗っていた馬に名前が付いていないという点である。

In Morauntes most nede
His stede bak brak on to.

Up he stirt in drede
And seyð, “Tristrem, alight,
For thou hast slayn mi stede.
Afot thou schalt fight.” (ll. 1055-60)

アイルランドからやってきた騎士は“For thou hast slayn mi stede.”（「お前が私の馬を殺してしまったのだから」）と理由を付け加えている。Morauntにとって馬の死は怒りや哀しみといった感情を喚起するほど重大な出来事ではない。馬を失い圧倒的に不利な状況になった自分の身を案じているにすぎない。Morauntの言葉に従い馬を降りると、Tristremは再び戦い始めた。

RowlandeやOttuell, Tristremが相手の馬の死に関心であった一方で自分の馬の死に関心な騎士もいる。Beuesがその時乗っていた馬がケルンでのドラゴン討伐の際に命を落とすが、それに対してBeuesは何も言わない (ll. 2777-82)。Guyはデンマーク王Anlufeがイングランドに派遣したCollebrandeとの戦闘で馬を殺されるが、その死を全く意識していない (ll. 10269-74)。TryamowreはAragon王国での一騎打ちで打ち負かしたMoradusの兄弟との戦いで自分の馬を殺されるが、物語にはTryamowreの反応を示す記述は見つからない (ll. 1435-40)。そして*Sir Eglamour of Artois*ではSidonの街で巨人Marrassと戦った主人公はその馬を殺されたにも関わらず、これまでの騎士と同様にその死に対して心を動かされることはない (ll. 583-8)。

これまでの例では、登場人物が馬の死に関心であることが騎士の反応が物語から欠落していることから分かるが、*Lybeaus Desconus*には興味深い描写がある。巨人Magusと戦うGuingalinは馬の頭を狙われて、騎乗していた馬を殺されてしまう。馬は崩れ落ちるようにして命を落とすがGuingalinはその死に対して特別に反応を示すことはない。この点は他の騎士物語と相違ない。注目すべきは、“Syr Lybeous nought sayde” (l. 1381) という表現である。これまで引用した場面にはないこの「Lybeous 卿は何も言わなかった」という一言は騎士の無関心を改めて強調しており、中世イングランドの翻案者が騎士の馬の死に対する関心の無さに注意を引こうとしている印象さえ覚える。類似する表現はGuyとインドから呼び寄せられた巨人Amerauntとの決闘の場面にもある。Amerauntの攻撃で馬を失ったGuyは立ち上がり巨人に攻撃を仕掛けると剣は相手の兜に当たるも滑るようにして狙いを外し、相手の馬の首を斬り落としてしまった。崩れるようにして倒れる馬とともに地面に投げ出されるが、巨人は自分の馬の死には目もくれない。この時の様子はAmerauntが「不平を言わずに」(“playned hym nothyng” (l. 8017)) すぐに飛び起きたと描かれている。

騎士の馬が命を落とすのは戦いの場だけではない。Chrétien de Troyesの*Le chevalier au lion*の中英語訳では、Ywainが泉の騎士を追う途中で城門の罫にはまって馬を失う (ll. 679-690)。*Sir Gowther*では、主人公が出生の秘密に気づく以前には母親の騎士を次々に襲ってはその馬を斬り伏せていた (ll. 163-4)。*Sir Degrevant*では待ち伏せをしていた

Eymur the Kayousらの馬に主人公が報復している (ll. 1645-6)⁽⁸⁾。さらに Arthur や Eglamour は狩の最中に馬を失っている⁽⁹⁾。特に *Amis and Amiloun* には印象的な場面が描かれている。

For nothing nold he spare:
He priked the stede that him bare
Bothe night and day.
So long he priked withouten abod,
The stede that he on rode,
In a fer cuntray,
Was overcomen and fel doun ded.
Tho couthe he no better red—
His song was 'Waileway!' (ll. 978-84)

Amiloun を探す Amis は自分の乗る馬に休みなく拍車をかけ続けた結果、馬は疲れて死んでしまう。“His song was ‘Waileway!’” は最初馬の死を嘆いているような印象を与えるが、Amis は馬の死を嘆いているのではなく友を探す手段を失ったことを嘆いている。

2. 文学的な意義

これまで見てきた馬の死に際して騎士が示す二通りの反応—「激しい怒り」と「深い哀しみ」—は、中英語騎士物語においてその用例数の少なさを考慮すると極めて稀な描写である。特に馬の死を悼む描写の用例の少なさは際立っている。描写の質について考えてみると、Gawain や Alexander の例は登場人物の感情を殊更に強調して描いている点では感傷主義的な描写であると言えるかもしれない。先に述べたように Gawain の描写は苦痛や哀しみを伝える語彙が重層的に配置されているし、馬のために霊廟を建立して都市まで築く Alexander の行動は形にすることはできない馬との深い絆を顕在化させるもっとも有効な手立てである。同時に、二つの描写は登場人物たちの人間性の一端を示すことにも貢献している。馬の死を悼む姿の背後には、騎士の馬に対する愛着や愛情が見て取れる。Joyce E. Salisbury によれば、ペット飼育も人間と動物との境界線が曖昧になった結果、中世の知識人や教会が厳しく非難していたにも関わらず、中世の人々は動物を人間と同等に扱い愛情を注いだ⁽¹⁰⁾。騎士が馬の死を悲しむ場面は、人間と動物の境界線が曖昧になった時代の産物と言えるかもしれない。馬のために涙を流す主人公たちを登場させたこれらの作品は非難の対象となりえた作品である。しかし、そこに描かれる登場人物は理性や合理性とは相容れない人間的な性格を付与されている。愛するものを亡くしたために、その

(8) Thornton 写本版では、馬ではなく Eymur の部下の一人が命を奪われている。

(9) *The Avouyng of King Arthur*, ll. 199-206; *Eglamour of Artois*, ll. 391-2. 両者ともにイノシシに襲われて馬を失う。

(10) Salisbury 108-120.

死を悼むふつうの人間の姿である。馬の死を目の当たりにして哀しむ騎士の姿は、「感傷主義的」な描写であると同時に「人間主義的」な騎士像と作品の雰囲気を作り出す役割を担っている⁽¹¹⁾。その登場人物は、偉大な業績を成し遂げた騎士であるにも関わらず、血の通った「生の」人間である。

他方で馬の死に際して怒りを爆発させる騎士の姿はその理想像を体現していると考えられる。Ramon Llull は13世紀の騎士道に関する著書の中で騎士と馬との関係に詳細な解説を加えている。例えば、馬の世話は子供のうちから身につけておくべき騎士の名誉に関わる知識の一つであり⁽¹²⁾、馬の世話は騎士にとって欠かせない仕事でもあった⁽¹³⁾。さらに彼の手引書は騎士の勇気と高潔さの象徴である馬を持たないものは騎士の職に相応しくないと述べている⁽¹⁴⁾。Llull の詳述する騎士の姿が実際の騎士の姿でないことは想像に難くないが、中世における騎士の理想像を知る手がかりとなる重要な資料であることに違いない。Llull の描写をもとに騎士と馬との関係を考慮すると、理想とされる騎士にとって馬とは幼少の頃より身近な存在であったことから深い絆が生まれていたことであろう。また馬が騎士にとって自ら名誉を象徴するものであったとするならば、馬を傷つけられ失うことが騎士自身の名誉を傷つけられたことと同義と捉えられていたに違いない。事実 Lisa J. Kiser は騎士の行動規範が意図的に相手の馬を傷つけることを禁じていたと指摘し、馬を攻撃する騎士は臆病者とみなされ、その行為は不名誉であると考えられていたと述べている⁽¹⁵⁾。すでに見たように、怒りを露わにする騎士が描かれる場面のなかには馬の命を奪った相手に対して“vileinie”や“schame”といった騎士の名誉という概念と対をなすような言葉を発する騎士がいる。また15世紀に書かれた *Partonope of Blois* には、馬を失うことが騎士にとっての恥辱であったことを示す記述が残っている。

Hys stede dyed, and felle to grownde.

.....

Summe-wate aschamed was Partonope

Thatt thus ly3thtely vnhorsed was hee. (ll. 4014-31)

The stede felle vpon Surnegowre,

Where-of grette parte of hys honowre

(11) 私信にて二村宏江氏より馬を失い哀しむ騎士の姿と叙事詩の伝統との関連性を指摘して頂いた。『ローランの詩』において愛刀のために涙を流すローランの姿と馬を失ったために悲嘆する騎士の姿の間には類似性を見出すことは可能であろう。騎士の「深い哀しみ」の場面を持つ作品—特に *Wars of Alexander* と *Beues of Hamtoun* に限って言えば—英雄の事蹟を辿る特徴を有しているという点では叙事詩的な騎士物語である。それゆえ馬のために涙を流す騎士の姿が叙事詩の伝統に由来するという指摘は的を得ている。しかし他に叙事詩的な性格を帯びた騎士物語に騎士が「深い哀しみ」を示す場面が描かれていないことは、この種の描写と叙事詩の伝統との関連性に解決すべき問題を生じさせる。

(12) Ramon Llull 42.

(13) Llull 53.

(14) Llull 56.

(15) Kiser 110-111.

He loste at þat ylke ffalle. (ll. 4104-6)

主人公 Partonope が馬を失った時、「簡単に馬を失ったことを恥じた」と描かれている共に、Surnegowre が落馬した様子を「落馬とともに名誉も失った」と淡々と述べている。騎士が戦場で馬を失うことは騎士の名誉を傷つけられることに等しかった。名誉とは騎士道の行動原理の一翼を担うものであり、馬を殺すこと、そして殺されることが、不名誉なのである。名誉を傷つけられた騎士の反応として、自分の名誉を汚した相手に憤慨する騎士の反応はいたって自然である。騎士が怒りを露わにする場面は馬を失った際の騎士のあるべき心理状態を描いているように思える。名誉を重んじる騎士のあるべき姿—理想像—が怒りを露わにする主人公たちに投影されているに違いない。

馬の死を目の当たりにして「激しい怒り」を示す騎士の姿が中世における騎士の理想像とするのであれば、馬の死に対する無関心という騎士の態度が今回調査した作品の多くに見られる事実は極めて興味深い。用例数の多さはこうした態度が騎士物語に一般的な傾向であることを示している。騎士の理想像が、あるいは人間的な姿が、中世の騎士物語にはわずかし描かれていない一方で、馬の死に無頓着な騎士はなぜこのように多くの作品のなかに登場するのだろうか。騎士を馬の死に無関心にさせた要因は複数ある。

第一の要因として、14世紀初頭に起きたスコットランドとの戦争以降イングランド軍の戦術が大きく変化したことが挙げられる⁽¹⁶⁾。騎兵による突進を多用していたイングランド軍はスコットランドとの戦争で大きな被害を受けた経験から、フランスとの百年戦争ではイングランド軍は騎乗した射手と歩兵を戦闘で活用し、特に Crécy の戦いでは騎乗しての接近戦はもっぱら敗走する敵に追い討ちをかけることを目的としていた⁽¹⁷⁾。騎士の役割は変化し、結果としてその求められる姿も変わっていったに違いない。こういった戦争での騎士の役割の変化や、さらには騎士一人が負担する戦費の増大という要因は、馬上で戦う騎士を“hobelar”と呼ばれる馬で移動し、馬から降りて戦う兵士へと変化させた⁽¹⁸⁾。

第二に、中世社会における馬に対する印象が騎士文学における騎士の無関心という態度の一般化に大きく関わっている。Andrew Ayton は騎士や従者が消費する贅沢品に比べれば、馬は“perishable commodity”であったと考察している⁽¹⁹⁾。この馬の脆弱性という特徴が騎士の馬に対する無関心へとつながった可能性がある。すぐに壊れてしまう馬の世話になることがこの先あるだろうか。また同時に馬が「壊れやすい必需品」であると見なされていたとする Ayton の指摘は、馬と騎士との関係や馬の死に無頓着な騎士の姿に関する経済的な視点を取り入れた解釈につながる。当時の馬を手に入れるために必要な費用は馬の役割によって異なる⁽²⁰⁾。騎士が戦争で騎乗する“destrier”に限って見れば、最も安価な馬でも購入に10ポンドの費用がかかり、Edward三世が一頭の馬に150ポンド支払ったという記録も残っている⁽²¹⁾。14世紀、男爵や伯爵、公爵の収入は年間200ポンド

(16) Allmand 58-67; Ayton 26; Barber 30; Hyland, *Horse* 151.

(17) Barber 30-31; Hyland, *Warhorse* 37-42.

(18) Allmand 60-61; Hyland, *Warhorse* 32-33.

(19) Ayton 48.

(20) Davis 67; Hyland, *Warhorse* 29-30.

から10,000ポンド程と幅はあるものの⁽²²⁾、こういった騎士たちにとって馬の購入は負担とはならないだろう。一方下位の騎士の年収は5ポンドから40ポンド程であった⁽²³⁾。もっとも安価な馬でさえ購入に年収の4分の1以上の費用がかかるのであるから、こういった身分の騎士たちにとって馬の購入は相当大きな負担となったはずである。このような中世の騎士たちの経済状況を考慮すると、騎士物語における登場人物たちの無関心は、大きな経済的な損失を被っても代用馬をすぐに手に入れることのできる潤沢な資金力を暗示している。すなわち馬を失うことに頓着せずにいられることは豊かな経済力に裏打ちされた騎士の姿を示している。馬と騎士との関係を通して騎士の経済力を反映させたとする解釈は、*Athelston* で馬を失った使者が不平を漏らす様子や *Sir Amadace* で馬を守るために悪臭を放つ礼拝堂に近づけようとしない召使いの姿を考慮するとより説得力を増すはずである⁽²⁴⁾。すなわち、騎士物語の主人公たちやそれに準ずる登場人物たちが馬を失っても不平を言わず、また馬を危険に晒すことを厭わない姿が彼らの潤沢な資金があることを示しているのに対して、一般的に資金力に乏しい従者や召使いが馬を失うことに不平を漏らし、馬を失うことによる経済的な損失を嫌って危険を侵さない姿は彼らの貧しさを改めて強調していると捉えられる。

馬の死に対して無関心でいる騎士の姿からは、騎士の理想像や人間的な姿よりもむしろ現実社会の騎士の実態を反映させようとする意図が伝わってくる。騎士はその身分を維持していくために潤沢な資金力が必要不可欠であった。武器や鎧、遠征のためにかかる一切の費用に対する支出は当然のことながら、馬を購入し飼育するための費用も必要となる。*Sir Amadace* や *Sir Cleges* はまさに騎士には「金が要る」という現実を如実に物語っている作品である。購入やその飼育に莫大な費用のかかる馬の死とそれに無関心な騎士の姿は、経済的な恩恵を享受し何不自由のない生活を送ることのできる騎士の財力の裏付けとなっている。これは逆説的に、経済的な障壁によって騎士の身分を享受することのできる者とそうでない者を区別していると解釈することも可能である。馬の死に対する無関心な騎士の姿は登場人物の経済力を証明し、さらには馬の死に無関心でいられるほどの経済力を持たない者から差別化を図っている。このように騎士身分の排他性を象徴することにより、物語の騎士たちの無関心な態度が中世の騎士の実像の一端を映し出す鏡になっている。この点において、馬の死に無関心な騎士たちの態度は、実際的な態度であると言える。騎士物語に登場する従者や召使いのふるまいと比較した時には、その意図がより鮮明になる。

3. 課題と展望

馬が命を落とす場面に注目した時、騎士が示す反応はおよそ三つに分類することができる。騎士道の行動原理である名誉という概念に突き動かされ激しい怒りを露わにする「理想主義的な態度」、馬への信頼や愛着—愛情でさえあるかもしれない—を背景に悲しみに

(21) Hyland, *Horse* 150.

(22) Dyer 29.

(23) Dyer 29-30.

(24) *Athelston*, ll. 385-404; *Amadace*, ll. 94-6.

暮れる「感傷主義的・人間主義的な態度」、そして中世社会における騎士と馬の役割の変化や騎士階級の経済的な側面を示唆する「実際主義的な態度」である。

しかし本研究には克服すべき課題が山積している。第一に、本研究が予備的な性格が強いという点である。今回調査できた作品数は54作品に過ぎず、現存する騎士が登場する物語の数に比べて調査できた作品の数がわずかであったために包括的な研究ではなく、さらなる調査研究の結果として結論が変わる可能性がある。Helaine Newstead が「ロマンス」とした作品の数は120を越える⁽²⁵⁾。本研究で調査することのできた作品は、Newstead がロマンスと分類した作品の半分にも満たないことになり、包括的かつより正確な研究とするためにはさらに多くの作品内での騎士と馬との関係を精査する必要がある。

第二に、騎士物語の持つ主題が調査対象とする作品の選別に大きな影響を与えてしまうことが課題となっている。本研究では「騎士が登場する物語」を研究対象としたが、騎士物語は多くの場合「ロマンス」という枠組みのなかに内包される。他方でロマンスでありながら、騎士物語ではない作品もある。例えば、*Floris and Blancheflour* や *Emare* に代表されるような作品は「ロマンス」ではあるものの、筋書きや主人公は騎士物語のそれとは全く異なっている。より問題を複雑にするのは *Le Florence of Rome* のように騎士物語と聖女伝の主題を兼ね備える作品である。この作品はしばしば Geoffrey Chaucer の *The Man of Law's Tale* や *Emare* と比較されるために騎士物語に見られる筋書きや要素がまったく描かれていないような印象を与えてしまうが、実際は騎士同士の戦闘の場面が作品の半分近くを占めている。作品のタイトルや先入観が対象とすべき作品を見落とさせてしまう危険性を孕んでいる。また、*Cleges* や *Amadace, Robert of Cesile* といった作品の主人公は騎士であるものの、その筋書きは騎士物語のそれとは明らかに異なり戦闘の場面は皆無で教訓的な要素の色合いの濃い作品である。登場人物が騎士である以上は騎士物語として分類されてしかるべきであるが、筋書きは教訓詩や説教のそれである。これらの作品は研究対象としての「騎士物語」という枠組みの妥当性に疑問を投げかけているように思える。さらに *King Horn* や *Morte Arthur*, Chaucer の *The Knight's Tale* のように戦闘の場面があっても馬の死に言及すらない作品が多数あり、これらの作品を本研究においてどのように扱い解釈すべきか考慮する必要がある。

最後に、中英語の作品とその原典との比較は馬の死に対する騎士の態度を類型化する際に、描写の独自性に関する問題を提起する。すなわち、中英語騎士物語に現れる描写が中英語の翻案者の独創性によるものなのか、あるいはすでに原典に存在していた描写を忠実に再現しただけにすぎないのかという問題である。*Beues of Hamtoun* はアングロ＝ノルマン語版を比較的忠実に翻訳したものとされており、*Guy of Warwick* も同様にアングロ＝ノルマン語で書かれた原典が残っている。そしてアーサー王物語の多くが古フランス語ロマンスの焼き直しである。中英語騎士物語の多くが大陸ですでに成立していた物語の翻訳や翻案にすぎず、特に忠実な翻訳であった場合においては中英語韻文騎士物語における騎士と馬との関係について見られる特徴は以前から大陸の文学的な慣習のなかですでに成立していたと考えられる。しかし原典にはない挿話が、中英語の騎士物語には描かれてる

(25) Newstead 11-6.

場合もある。例えば、*Beues of Hamtoun* に描かれるケルンでのドラゴン退治の場面は中英語に翻訳された際に新たに付け加えられた場面であり、主人公が馬の死に対して無関心であるという点で極めて興味深い。なぜなら、馬を殺されたことに激怒し、愛馬を失い悲哀を感じる主人公が馬の死を意に介さない姿は、一貫していた *Beues* の人物描写に混乱をもたらすからである。中英語で書かれた際に加筆された内容こそがむしろ中英語騎士物語の独創性であり重視すべき事実である。このように、原典の残る作品については、原典との比較検討は中英語騎士物語における騎士と馬との関係の真の姿を推察する上で必要不可欠であり、そうすることで中世イングランドにおける騎士と馬との関係の独自性を見いだすことにつながる。

騎士の馬の死に対する態度に注目することで、騎士の示す態度の違いが中英語騎士物語を三つのカテゴリーへの分類可能性を提示した。馬は騎士を騎士たらしめていると同時に、騎士が馬に示す態度を通して馬は作品を特徴付け作品を分類する上での基準となり得る。馬は中世の人の社会的な身分を定義づけるだけでなく、馬と密接な関係を持つ人々が活躍する作品を定義づける可能性をも秘めている。

[参考文献]

一次資料：

Amis and Amiloun (see Fellows).

Der Anglonormannische Boeve de Haumtone. Edited by Albert Stimming, Halle, 1899.

Athelston. Four Romances of England: King Horn, Havelok the Dane, Bevis of Hampton, Athelston, edited by Roland B. Herzman, Graham Drake and Eve Salisbury. Medieval Institute Publications, 1997.

The Avowing of King Arthur. Edited by Roger Dahood, Garland Publishing, 1984.

The Awntyrs off Arthure at the Terne Wathelyn. Edited by Ralph Hanna, Manchester UP, 1974.

Le Bone Florence of Rome. Edited by Carol Falvo Heffernan, Manchester UP, 1976.

Chrétien de Troyes. *Les Romans de Chrétien de Troyes IV: Le Chevalier au Lion*. Edited by Mario Roque, Champion, 1971.

Emare (see Mills)

The English Charlemagne Romances, Part I: Sir Ferumbras. Edited by Sidney J. Herrtage, Oxford UP, 1879; rpt. 1966.

The Erle of Tolous (see Fellows)

Fellows, Jennifer, editor. *Of Love and Chivalry: An Anthology of Middle English Romance*. J. M. Dent, 1993.

Floris and Blancheflour (see Sands)

Gamelyn (see Sands)

Havelok the Dane (see Sands)

Ipomadon. Edited by Rhiannon Purdie, Oxford UP, 2001.

King Arthur's Death: The Middle English Stanzaic Morte Arthur and Alliterative Morte

- Arthur*. Edited by Larry D. Benson. U of Exeter P, 1986.
- King Horn* (see Fellows).
- Lai le Fresne* (see Sands).
- Laskaya, Anne, and Eve Salisbury, editors. *The Middle English Breton Lays*, Medieval Institute Publications, 1995.
- Lull, Ramon. *The Book of the Order of Chivalry*. Translated by Noel Fallows, The Boydell Press, 2013.
- Lybeaus Desconus*. Edited by Maldwyn Mills, Oxford UP, 1969.
- The Middle English Version of Partonope of Blois*. Edited by A. Trampe Bodtker, Kegan Paul, 1912; rpt. Kraus Reprint, 1981.
- Mills, Maldwyn, editor. *Six Middle English Romances*. J. M. Dent, 1973.
- Der Mittlenglische Versroman über Richard Löwenherz*, Kritische Ausgabe Nach Allen Handschriften mit Einleitung, Anmerkungen und Deutscher Übersetzung. Karl Brunner, Wilhelm Braumüller, 1913.
- Octovian*. Edited by Frances McSparran, Oxford UP, 1986.
- The Poems of the Pearl Manuscript*. 5th ed. Edited by Andrew Malcolm and Ronald Waldron, U of Exeter P, 2007.
- Robert of Cisyle. Amis and Amiloun, Robert of Cisyle, and Sir Amadace*, 2nd ed., edited by Edward F. Foster, Medieval Institute Publication, 2007.
- The Romance of Beues of Hamtoun*. Edited by Eugen Kölbing, Kraus reprint, 1978.
- The Romance of Guy of Warwick: The Second or 15th-century Version*. Edited by J. Zupitza, Oxford UP, 1875-6; rpt. 1966.
- The Romance of Tristan*. Translated by Renée L. Curtis, Oxford UP, 1994.
- Sands, Donald B., editor. *Middle English Verse Romances*. U of Exeter P, 1986.
- Sir Launfal* (see Sands).
- The Sege off Melayne, The Romanec of Duke Rowland and Sir Otuell of Spayne, The Song of Roland*. Edited by Sidney J. Herrtage, N Trübner, 1880; rpt. Kraus Reprint, 1975.
- Sir Amadace* (see Mills).
- Sir Cleges* (see Laskaya and Salisbury).
- Sir Degaré* (see Laskaya and Salisbury).
- Sir Degrevant*. Edited by L. F. Casson, Oxford UP, 1949; rpt. 1970.
- Sir Gawain: Eleven Romances and Tales*. Edited by Thomas Hahn, Medieval Institute Publication, 1995.
- Sir Gowther* (see Mills).
- Sir Eglamour of Artois*. Edited by Frances E. Richardson, Oxford UP, 1965.
- Sir Isumbras* (see Mills).
- Sir Orfeo* (see Sands).
- Sir Percyvell of Gales. Ywain and Gawain, Sir Percyvell of Gales, The Anturs of Arther*, edited by Maldwyn Mills, J. M. Dent, 1992.
- Sir Tristrem. Lancelot of the Laik and Sir Tristrem*, edited by Alan Lupack, Medieval

- Institute Publications, 1994.
The Squire of Low Degree (see Sands).
The Tournament of Tottenham (see Sands).
Syr Tryamowre (see Fellows).
The Tail of Rauf Colizear with the Fragments of Roland and Vernague and Otuel.
Edited by Sidney J. H. Herrtage, Oxford UP, 1882; rpt. Bungay: Richard Clay, 1969.
The Wars of Alexander. Edited by Hoyt N. Duggan and Thorlac Turville-Petre, Oxford UP, 1989.
Ywain and Gawain. Edited by Albert Friedman and Norman T. Harrington, Oxford UP, 1964.

二次資料 :

- Allmand, Christopher. *The Hundred Years War: England and France at war c. 1300–c.1450*. Cambridge UP, 1989.
Ayton, Andrew. *Knights and Warhorses: Military Service and the English Aristocracy under Edward III*. The Boydell 1994.
Barber, Richard. *The Reign of Chivalry*. The Boydell 2005.
Barber, Richard, and Juliet Barker. *Tournaments: Jousts, Chivalry and Pageants in the Middle Ages*. The Boydell, 1989.
Barker, Juliet R. V. *The Tournament in England 1100–1400*. The Boydell 1986.
Crouch, David. *Tournament*. Hambledon and London, 2005.
Davis, R. H. C. *The Medieval Warhorse: Origin Development and Redevelopment*. Thames and Hudson, 1989.
Dyer, Christopher. *Standards of Living in the Later Middle Ages: Social change in England c. 1200–1520*. Revised edition. Cambridge UP, 1989.
Hyland, Anne. *The Medieval Warhorse: From Byzantium to the Crusades*. Alan Sutton Publishing, 1994.
---. *The Warhorse 1250–1600*. Sutton Publishing, 1998.
---. *The Horse in the Middle Ages*. Foreword by Joan Thirsk, Sutton Publishing, 1999.
Kaeuper, Richard W. *Chivalry and Violence in Medieval Europe*. Oxford UP, 1999.
Kiser, Lisa J. “Animals in Medieval Sports, Entertainment, and Menageries.” *A Cultural History of Animals in the Medieval Age*, edited by Brigitte Resl, Berg, 2007.
Newstead, Helaine. “Romances: General.” *A Manual of the Writings in Middle English 1050–1500*, edited by J. Burke Severs, vol. 1, The Connecticut Academy of Arts and Sciences, 1967.
Salisbury, Joyce E. *The Beast Within: Animals in the Middle ages*. 2nd ed. Routledge, 2011.

(2018.5.21 受稿, 2018.7.2 受理)

〔抄 録〕

中英語騎士物語において馬は欠かすことのできない要素である。主人公がヨーロッパの隅々にまで移動することを可能にし、武勲を立て栄誉を勝ち取る手助けともなる。しかし騎士の成し遂げる華々しい偉業の影に隠れ、馬が持つ文学上の重要性についてあまり考察されてこなかった。騎士と馬との深い関係を読み取ることのできる場面は数多くあるものの、本稿では特に馬の死の場面に注目している。多くの作品のなかに見られる馬の死の場面は、そこに描かれる騎士の姿を指標とすることで三つの類型、すなわち「激しい怒り」、「深い哀しみ」そして「完全な無関心」に分類することができる。これら三つの類型がそれぞれ持つ表現の特徴や歴史のおよび文化的な背景を手掛かりとして馬の死の場面に見られる騎士の描写の背後にある文学的な意義を探ると、「激しい怒り」の背後には中世の人々が理想とする騎士の姿が、「深い哀しみ」の背後には人間的な騎士の姿が、そして「完全な無関心」の背後には現実的な騎士の姿が見えてきた。